

障害とともに明日へ

唐津手話の会

唐津手話の会は若狭國体の開催を契機とし、前年の1975年に発足した県内でも古参のグループ。昨年、浜玉・呼子・相知手話の会と合併し、新生「唐津手話の会」として新たな歴史の一步を踏み出した。会員は約60人。主な活動は手話通訳者の育成、各種大会・イベントでの

通訳、自治体や学校への講師派遣など。公的な通訳派遣だけでなく、交通事故、医療関係など個人の依頼にも可能な限り対応。週一度の例会では手話技術の向上に努め、聴覚障害者と交流を深めている。

聴覚障害者に対する福祉はだいぶん向上してきたが、まだまだ完璧とは言いがたい。例えば市の行政放送。最近では字幕も多く取り入れているが、会長の富田芳郎次さんは改めて手話通訳の必要性を訴える。「英文を見た時、一つひとつの単語は分かってても、全体の意味はチンプンカンプンということが多いでしょう。聴覚障害者は日本語を幼いころから自然に身につけてきた訳ではなく、全く同じ感覚なんです」と

説明。市にはこのほか手話通訳の市役所常設、独自の通訳奉仕員派遣制度導入の働き掛けも行っている。

手話を覚えれば世界が広がり、新しいものが見えてくる。マスターするには5、10年はかかるため途中で諦める人も多いが、「たとえ手話が自分に合わなかったとしても、何かを考えるきっかけにはなるはず。始めることが大事ではないでしょうか」と富田さん。会則は「障害者とともに」、だれもが安心して暮らせる社会を目指して学び続ける。「広く市民の方に聴覚障害、手話のことを理解してもらいたい。今年には障害者の人権を守る活動を、もっともっと活発に行っていきたい」



みんなで手話で「おめでとう」